

TOPICS

祝 2016年度秋季学位記授与式・卒業式

広報誌編集委員会

2 016年度の学位記授与式・卒業式が2016年9月16日(金)に安田講堂で実施された。理学系研究科・理学部からは福田裕穂研究科長・学部長と、理学系研究科総代としてMA Dichao(マ テキチョウ)さ

ん(生物科学専攻修士), Yin Xiaofeng(インギョウフン)さん(生物科学専攻博士)が壇上に立った。

また、小柴ホールにて博士課程および修士課程の学位記授与式が行われた。

卒業・修了されたみなさんに心からお祝いを申し上げます。みなさんが今後、世界の学術研究の進展に一層貢献することを期待いたします。



安田講堂での式典の様子(写真:尾関裕士)



福田研究科長(中央)と総代のYin Xiaofengさん(左)とMA Dichaoさん(右)

理学系附属「生物普遍性研究機構」が発足

佐野 雅己(生物普遍性研究機構長/物理学専攻教授)

2 016年10月1日(土)付で理学系研究科附属「生物普遍性研究機構」が発足した。本機構は、東京大学の理論生物学、定量生物学に関する研究者を結集して、数理と物理を武器に、すべての生物に共通するメカニズムや普遍的な法則を明らかにすることを目的に設立された。この構想は、理学系研究科と総合文化研究科が中心となり2012(平成24)年度頃から計画され、2部局連携で2013、14年度と連続して本部に提案され、その後の審議を経て、2016年度概算要求として文部科学省、財務省に提出、2015年末に正式な採択と予算配分が決定された。

10月14日(金)には、機構の発足を記念して伊藤謝恩ホールにおいて、機構開所式、記念講演会、懇談会が開催された。開所式では、五神真総長から東京大学として

の本機構への期待を込めた熱のこもったメッセージが述べられ、引き続き、福田裕穂理学系研究科長から担当部局長としての、小川桂一郎総合文化研究科長から連携部局長としての挨拶があった。また、来賓として、文部科学省高等教育局の常盤豊局長、日本学術振興会学術システム研究センターの佐藤勝彦所

長(東京大学名誉教授)から暖かい励ましと祝辞をいただいた。機構長による機構概要の説明に続いて行われた記念講演会では、総合研究大学院大学の伏見譲学長補佐、総



生物普遍性研究機構開所式で挨拶する五神真総長

合文化研究科(理学系兼務)の金子邦彦教授、名古屋大学の郷通子理事からそれぞれのご研究と新しい学問分野に関する期待が語られ、盛況のうちに終了した。

化学東館竣工100周年

山内 薫 (副研究科長／化学専攻 教授)

化学東館は、その正面玄関を挟んで、左右に対称に伸びる低層の建物であり、赤レンガの壁と白く見える御影石に上下を縁取りされた縦長の窓のコントラストによって、その優雅さが強調されている。この化学東館は東京大学本郷キャンパスの最古の建物である。

東京開成学校と東京医学校の合併によって、法医文理の4学部を擁する東京大学が1877年に設立されたとき、理学部化学科は神田一ツ橋通りの旧東京開成学校校舎にあった。その後の1885年に本郷キャンパスの現在の医学部付属病院敷地内に移転し、1888年には新築された東京帝国大学理科大学本館(現、理学部1号館の場所にあった。)の2階に移転した。櫻井錠二や池田菊苗らの居室と研究室もそこにあった。その後、1916年3月に、東京帝国大学理科大学化学教室が竣工すると、化学科は、その新しい建物に移転することになる。この理科大学化学教室の建物こそ、今年竣工100周年を迎えた化学東館である。

化学東館は、本学の建物の中で、鉄筋コンクリートを採用した最初の建物であった。池田菊苗の基本構想をもとに、当時の東京帝国大学営繕課長であった山口孝吉によって設計された地上2階、地下1階の建物である。実は、1923年3月には、ほぼ同じデザインの地上2階の第2期棟というべき



現在の化学東館

建物が北側に中庭を囲むように、第1期棟(化学東館)とは独立した形で建設された。この化学北棟が完成した年の9月に東京を関東大地震が襲った。この関東大震災に際して、本郷構内の多くの建物が大破したり、火事の被害を受けたりしたが、化学東館と化学北棟だけは、軽微な損害を受けたのみで無事であったという。

1936年から1937年にかけて、化学東館と北棟の部分をつなぐ部分が増築された。

1962年に化学新館(現・化学本館)が建設されると、化学東館と化学北棟がつながった建物は化学旧館と呼ばれるようになり、その後20年間、1983年までは、化学教室の教育と研究の活動は化学新館と化学旧館で行われることになっ

た。しかしながら、1982年に化学西館が建築されると、理学部7号館の建築計画に伴い、化学北棟と、化学北棟と化学東館をつなぐ増築部分は1984年に取り壊されることになる。残念ながら1923年に建設された化学北棟は、61年の使命を終えることになった。一方、より古い化学東館は、1916年の竣工当時と同じ形で残されることになった。

昭和初期の化学東館の写真を見ると、正面玄関の両脇にあるヒマラヤ杉は、まだ1階部分の天井の高さであったことが分かる。巨木となったヒマラヤ杉は、今や、化学東館の屋根をはるか高くから見下ろしている。確かに長い年月が経過している。しかし、今だ、化学東館はその古さを感じさせない。化学東館にとってこの100周年は未来への通過点である。

参考文献：東京大学大学院理学系研究科・理学部化学教室雑誌会編、「東京大学理学部化学教室の歩み」、東京大学大学院理学系研究科・理学部化学教室雑誌会(2007)。



昭和初期の化学教室(化学教室蔵、畑一夫氏提供)